

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 『左氏會箋』の基礎的研究

氏 名 竹内 航治

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、竹添進一郎による『左氏會箋』を研究対象とし、その成立までの経緯を明らかにすることを目的とする。

『會箋』は宮内省図書寮所蔵の旧鈔卷子本『春秋經傳集解』を底本として『左傳』定本の作製を企図するとともに、『左傳』の先行注釈を広く集めて編まれた。『會箋』の注釈内容は豊富であって論ずるに値する問題は多いが、引用した先行注釈の出处を明示しない竹添の態度が『會箋』研究を阻む要因となっている。個々の注釈内容について論じるためには注の出处を逐一明らかにする必要があるが、それを直ちに終えることはできない。竹添が取り入れていった諸注釈書の中から、『會箋』の中心に位置するものをさし当たって選別する必要がある。本論文ではそれを行うため、現存する『會箋』稿本と、竹添が『會箋』以前に関わった『左傳』評注書を調査する。稿本などに残された情報を手がかりとし、竹添が『會箋』撰述に当たって重要視していた先行注釈書を探らんとするものである。

第一章では『會箋』の概要と竹添の経歴をまとめ、あわせて竹添の弟子である島田翰と『會箋』の関わりを示した。また『會箋』に四種類の刊本が存在することを確認し、広く普及している漢文大系本の問題点を指摘した。

第二章では『會箋』に見える注釈内容を仮に分類し、それぞれに関する先行研究をまとめた。また、出处を明記しない竹添の態度に対する岡村繁氏の批判と、柳本實氏・林慶彰氏による竹添に対する部分的な弁護を紹介した。また、『會箋』の出处調査を行った上野賢知氏の研究を取り上げ、『會箋』に膨大な数の先行注釈書が引用されることを確認した。

第三章では上野賢知氏の研究を踏まえ、静嘉堂文庫および東京都立図書館諸橋文庫に残る『會箋』稿本について検討した。静嘉堂文庫には『左傳集説』「二十五冊本」「八冊本」「二冊本」、都立図書館諸橋文庫には「三十一冊本」が蔵されるが、竹添注の追

加訂正を調べることで『左傳集說』（準備稿）→二十五冊本（第一稿）→八冊本（第二稿）→三十一冊本（第三稿）→二冊本（第四稿）という作成順序が明らかとなった。稿本を『左傳』テキストとして見た場合、初期稿本の本文に旧鈔卷子本『春秋經傳集解』と一致しない例がある。このことから、竹添は稿が進んだ段階で初めて卷子本を底本に定めた可能性があることを指摘した。また、竹添は稿が進む中で新しい注を追加するだけでなく、注を刈り込み整理する作業も行っていることを確認した。

第四章では、『會箋』準備稿である『左傳集說』について詳しく検討した。『集說』は『左傳』の先行注釈書を抜き書きしたものであるが孫引きも多く、同書に取られる清朝考証学者の説は主に『左傳輯釋』より孫引きされていることが判明した。『集說』作成時に竹添が直接参照したと見なしうる注釈書は十数種類程度であるが、『會箋』成本が引く注釈書の数はそれよりもはるかに多い。だが成本が目立って多く引く文献の名は『集說』の中に全て見ることができ、竹添が依拠せんとした基本文献は『集說』作成時にすでに定まっていたと考えられる。『集說』に抜き書きされるのは『左傳輯釋』『左傳續考』『讀左補義』『左傳經世鈔』『左傳彫題略』『春秋大事表』『春秋左氏傳校本』『左繡』などであり、特に安井息軒『左傳輯釋』と亀井昭陽『左傳續考』を中心として作成されている。

第五章では、『集說』より成本に至るまで『會箋』の中心に存在する『左傳輯釋』と『左傳續考』を取り上げ、両者が『會箋』でいかに受容されているかを論じた。『會箋』の訓詁は主に『左傳輯釋』に拠りつつ、安井息軒が参照できなかった先行注釈を利用してそれを補っている。また、『左傳續考』は『左傳』の文章表現について文字のレベルで解説する注を施している。『會箋』の稿が進むにつれてその多くが取り込まれ、『會箋』の特徴を形成していることが判明した。

第六章では、竹添が『會箋』以前に刊行した評注書『左傳鈔』について論じ、『會箋』との比較を行った。『左傳鈔』を第一集とした古文選集『歴代古文鈔』が竹添の名を冠して刊行されているが、これが（清）高嵯『高梅亭讀書叢鈔』を抄録したものであることは先行研究に指摘がある。『歴代古文鈔』の序および広告文によれば、同選集は「文法」（文章を構成する技法・修辭法）を学ぶための教科書として刊行されたものであり、『左傳鈔』は『左傳』の文章表現を詳細に解説している。『會箋』成本に取られる『左傳鈔』の評注は少なく、『會箋』は『左傳鈔』を直接発展させた注釈書ではない。ただし第一稿・第二稿の段階では『左傳鈔』からの引用が目立つ上、第二稿は『左傳鈔』と同様に頭注による「文法」解説を行っていることが明らかとなった。

第七章では、文法解説の例として「伝文の分節化」「伏線の指摘」を取り上げて『左傳鈔』と『會箋』を比較した。『左傳鈔』はこれらの例において詳細な評注を施すが、それが『會箋』で取られることは少ない。『會箋』が「伝文の分節化」「伏線の指摘」を行う際には主に『左傳續考』に拠っており、その補助として『左傳鈔』を用いる場

合もある。竹添が稿本初期まで取っていた『左傳鈔』の多くを削ったのは、やや煩雑に流れがちな高塘の評注に全面的に依拠することを避け、より簡要な注釈を目指したためと考えられる。

以上の検討により、『左傳輯釋』と『左傳續考』が『會箋』稿本より成本に至るまでの中心に存在していることが明らかとなった。『會箋』は『左傳輯釋』を媒介として清朝考証学者が残した訓詁の成果を受容している。また、『會箋』に最も多く取られる注釈書が『左傳續考』であり、『會箋』は文章表現に関する解説も同書に多くを拠っている。『左傳』の「文法」を解説することが『左傳鈔』刊行時点における竹添の重要な課題であり、『會箋』稿本にはその直接的な影響が認められる。『左傳鈔』の評注は稿が進む中で多くが削られ、『左傳續考』に依拠する「文法」解説に重心が移っている。『左傳續考』の他、『會箋』準備稿より名が見える『讀左補義』『左傳經世鈔』『左傳義法舉要』などが、『會箋』の「文法」解説について論じるために取り上げるべき先行注釈書である。